松江市立古志原小学校　３年部実践

報告者　大道智弘

1　単元名　　用具を操作して運動を楽しもう～テニピン～

2　単元の目標

○　用具を使ってボールを返球したり、ボールを操作しやすい場所に移動したりして、ゲームをすることができる（知識・技能）

○　みんなが楽しめるようにルールを工夫したり、ボールをうまく打ち返すための方法や打ちやすい場所などについて考えたり、伝えたりしている。（思考・判断・表現）

○　ルールを守り、仲間と励まし合いながら、進んで練習やゲームに取り組むことができる。（主体的に学習に取り組む態度）

3　基盤（省略）

4　単元計画（全８時間）（省略）

5　授業の実際

【視点①】なりたい姿をイメージし、自他の課題や変容の自覚を促す「単元構成と授業構成」の追求

≪工夫①≫なりたい姿から児童が自ら考える段階的な技能課題

３年生の子どもたちにとって、テニピンという運動はやったこともなければ、見たこともない運動である。そこで、取り組む前にテニピンの動画を見せて運動のイメージを持たせることからスタートした。「あんなふうに打てるようになりたい。」というなりたい姿のイメージを持った後、実際にテニピンをやってみると「うまくいかない。」「動画のようにできない。」という気持ちが芽生えた。そこで、教師から「なりたい姿になるためにはどんなことができるようになるといいかな？」と問いかけ、単元の中で身につけたい技能を設定した。単元の技能課題には、「ラケットに当てる」「思ったところに打つ」「ボールの強弱をつける」「動きながらキャッチする」「相手の打ちやすいところに打つ」などがあげられ、それらを１時間ごとの課題として取り上げて活動を行うようにした。

≪工夫②≫できることからスタートし、「できそう」につなげる授業構成

授業は、毎回の授業のねらいにつながる簡単な課題からスタートし、その後、その時間の課題に挑戦するようにした。３年生にとって用具を操作して思うように運動することはなかなか難しいことであるが、「できた！」という成功体験から始めることで、「できそう」という気持ちを喚起し、「やってみよう」という前向きな意欲を持たせながら学習を進められるようにした。また、学習が進んでも子どもたちがそれぞれの「できそう」な課題に挑戦できるように、授業の前半に時間を確保しそれぞれの子どもにとって最適な学びができるように工夫した。

≪工夫③≫「変容の自覚」を促す振り返りの確保

授業では、全体の課題として「ラリーを続けよう」ということを掲げ、毎回全体でめざす回数を設定し目標を決めて取り組んできた。ただ、回数のみを振り返りの視点として用いるのではなく、それぞれが「できるようになったこと」を発表する時間をとり、個人の伸びに気がつけるようにした。また、ラリーをする際には、返球されたボールを「取って打ち返す」方法と「直接打ち返す」方法を選択できるようにして、自分の伸びに応じて自分で運動の方法を選択できるようにした。そのようにすることで、伸ばしたいところを焦点化し、自己の変容に気がつきやすいようにした。

6　成果（○）と課題（▲）

≪工夫①≫なりたい姿から児童が自ら考える段階的な技能課題

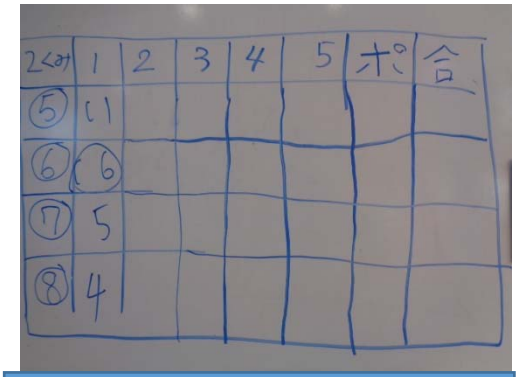
○　導入の段階で動画を見せることは、テニピンに対するイメージをもち、なりたい姿を具体的に設定することにつながり、とても有効であった。

○　なりたい姿のイメージをもったうえで運動に取り組むことで、うまくいかない自分に気がついたり、改善したいポイントを明確にしたりすることにつながり、それぞれが自分の課題を設定して運動することができた。

▲　３年生にとって用具を操作して動きのあるボールを動きながらとらえることが思いのほか難しく、１時間で技能を習得し次のステップへ移行するような流れにならなかった。単元の後半から、個人の課題を追求できる時間を作り、それぞれに合わせた技能練習をできるようにしたが、個人練習のような形になってしまい、授業としてのめあての設定が難しかった。

≪工夫②≫できることからスタートし、「できそう」につなげる授業構成

○　３年生の子どもたちは、用具を操作してボールを動かすこと自体を楽しんで行っていたので、遊びのような活動に少し課題を持たせたものから活動をスタートすることで、楽しい運動という感覚をもったまま取り組むことができた。



記録を整理しながら活動

○　単元の中盤からラリーを続けるという課題を提示し、ラリーの最高記録をチーム同士で競うとともに、各チームの最高記録の合計が目標とする回数を超えることをめざして活動をした。難しい目標設定を行わず、少しずつ目標値を上げることで子どもたちが何度も「できた」と思える場面があり、できたことをみんなで喜び合うことで、意欲的に取り組むようになっていった。

≪工夫③≫「変容の自覚」を促す振り返りの確保

○　授業では全体の課題としてラリーがどれだけ続くかということに取り組む一方で、振り返りの時間にどんなことができるようになったかを発表する時間を取った。そのようにすることで、「たくさんラリーができてよかった」などの全体に関わる振り返りではなく、子どもが自分自身の変容について、実感を伴った振り返りをすることにつながった。

ラリーに取り組む子どもたち

▲　３年生の授業では、ラリーが続くことを課題として取り組んだ。ので「上手に返して得点が取れた」とか「相手の取りにくい強いボールが打てるようになった」といったような自分自身の変容に気がつけるような場面が少なかった。